



角川文庫

—3583—

昼下りの階段

黒岩重吾



角川書店



角川文庫

ひるさが かいだん
昼下りの階段

昭和五十年十月三十日 初版発行
昭和五十一年三月三十日 再版発行

著作者 黒岩重吾

発行者 角川春樹

印刷者 村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
株式會社 角川書店

電話東京四七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

定価は、カバーに
明記してあります

Printed in Japan

旭印刷・若林製本

0193-126815-0946(0)

昼下りの階段

黒岩重吾

陽の当る席

—

多治見の席は陽の当る場所にあった。御堂筋に面した最新建築による瀟洒なクリーム色のビルは、陽を浴びるとビル街の中でも際だって輝く。大きな一枚ガラスは、空の色のように淡青色で、外から見るとしゃれた喫茶店の窓ガラスのように美しい。

多治見が部長である事業部は三階にあった。東のガラス戸際の大きなデスクは、社員達の方に、いかめしく据えられているが、南のガラス戸も直ぐ傍なので、ほとんど一日中陽が当たっている。

多治見は資本金五十億、西日本化学の事業部長である。まだ重役になっていないが、四十三歳という若さであった。社内ではもちろん出世頭である。

営業部長、総務部長も五十前後だった。

再来年あたりは重役になれる、と多治見は思っている。将来の社長候補である大板専務の受けも良いし、それに多治見の手腕は、社内の誰もが認めている。

ドメルの服を着、外国製のカーフの靴をはき、翡翠のカフスボタンをはめた多治見のスタイルには、一分の隙もない。

営業部について、事業部はいそがしい。製品の展示会、工場見学、政治家の招待から、講演会、マスコミとのタイアップによる宣伝分野まで受け持たねばならない。

個々の製品の宣伝は、宣伝部が受け持つが、社の宣伝となると事業部の仕事である。

それに西日本化学の宣伝部は、宣伝課から昇格したばかりで、今まで事業部に属していた。宣伝部長はデザイナー上りだから、幅広い仕事は出来ない。

ということは、社内での権力分野で占める比重が軽いということだった。

多治見のデスクには、既決と未決の書類入れがあるが、書類がたまっているのは、大抵既決の方である。それだけ、判断力と決断力に富んでいるのである。

窓ガラスを通す春の陽は、実に気持が良い。事業部は人の出入りが絶えない。

それも午後四時を過ぎると、一段落する。多治見は煙草に火をつけると、微笑を浮かべながら室内を見廻した。不機嫌な時でも、多治見はなるべくおだやかな表情を保つように努力していた。多治見は色が白く太っている。鼈甲べっこうの眼鏡の中の瞳は大きく、いかにも切れ者の部長といったタイプである。社員達は、多治見を尊敬し怖れている。多治見を軽蔑している社員は少ない筈だ。部下を統率することは、尊敬と畏怖いふぶを抱かせることである。多治見はその主義を貫いて来た。彼は何時も部下に次のように言っている。

「僕は三度まではおだやかに注意する、四度めは注意しない、その代り僕のブラックリストには、君の名前がのっているものと、思い給え」

二年前、多治見に反抗した課長が居た。大柄で豪傑を気取っている男である。その課長はスタ

イリストである多治見と、初めから気が合わなかった。嫌なやつだ、と多治見は思った。しまいには、その課長の顔を見ただけで腹が立った。胸が悪くなる。

多治見は課長の欠点を探した。仕事は実に良くやって、文句のつけようがない。

多治見は三つの欠点を見付け出した。一つはその課長には、味方も多いが敵も多い、ということである。今一つは酒ぐせが悪い、ということであった。

そして、もう一つは、女子社員の尻をなでるくせがあった。この三つを合せて、多治見は課長を陥没させる策を練った。

多治見のように、外見おだやかなスタイリストは、秘書課員の受けが良い。

多治見は二十八歳の藤村頼子を選び出した。オールドミスで、秘書課の中では権力をふるっている。女としての魅力は余りなかった。

帰途を待ち受け、偶然出会ったふりをした。幾ら頼子の勘が鋭い、といっても事業部長が、自分を待っていたと思う筈はない。

たくみに課長に話題を持って行った。

「あいつも良い男だが、どうも女子社員のお尻をなでるくせがあるんでねえ」

「まあ、嫌らしいわ」

頼子はまだなでられたことがないらしい。課長も頼子のようなオールドミスは敬遠しているのだらう。頼子がなでられる女であったら、これほど憤慨はすまい。これは女心の微妙な心理である。

「なでられたら、大声で怒鳴ってやれば良い、大体、みんなが、嫌とかなんとか、嬉しそうな声をあげるから図に乗っているんだね」

「私だったら、思い切り怒鳴りつけてやります、この頃の若い女は、本当にだらだらしてますわ」

多治見は穏かな微笑を浮べて頼子と別れた。チャンスは案外早くやって来た。

或る昼、取引先の連中と、多治見と三人の課長がビールを飲んだ。課長は赤い顔をして社に戻った。多治見は用事をつくり頼子を呼んだ。そして頼子に、

「この書類を、坂田君のところに持って行ってくれ給え、僕が訂正した箇所を読み直して貰って下さい」

坂田とは課長の名である。

頼子は書類を持っていった。たいした訂正ではない。坂田の手がうっかり頼子のヒップをなでた。

その時の頼子の悲鳴と怒声を今でも多治見は思い出すことが出来る。

「なにをなさるんです、女のお尻をなでたりして、失礼にもほどがあります」

部屋中にとどろくヒスの声であった。いや、なでられたことを誇示したのかもしれない。

流石の坂田も、啞然と口を開けて、頼子を眺めるだけであった。その噂は、尾ひれがついて社内には広まった。頼子の前をなでた、と真顔で囁く者も居た。その日、多治見は坂田を誘いバーに行った。そのバーには、粗野な一見無神経な坂田を嫌っている部下を、あらかじめ呼んであった

昼のことがあったためだろう、坂田は酔った。もともと酒癖の悪い男である。

部下達は、多治見の意を知っていた。絡からんで来た坂田に皮肉な口調で応じた。すると坂田の鉄拳が二人の部下に向けられたのである。

グラスが落ちて割れ、大騒ぎであった。そのバーのマダムを、専務はひいきにしている。

課長クラス以下の人事異動の会議の際、多治見は坂田の左遷を主張した。

「社内で秘書課員のお尻をなでるのは、まだ許されます、しかし、社外で、人眼のあるバーで、部下を擲なるような行為は、絶対許されません」

部長同格の秘書課長が苦い顔で、

「どっちもどっちでしょう、藤村君の件は、社長の耳にも入っています」

秘書課長の言葉で、坂田の左遷は決定した。反対したのは営業部長の安沢である。

安沢は磊落らいらくな男で、いかにも坂田をひいきにしそうな感じである。そういうえば、坂田が課長になる時も、安沢が押したようである。

坂田は広島支店長代理として飛ばされたが、その時から、多治見は、安沢をはっきり敵と見なしていた。

五時半の退社のベルが鳴る。

今日は宴会がない。夜は自由な時間であった、多治見の脳裡に、西日本化学の大株主、堀本の妻綾子の仄白い顔が浮ぶ。

亭主の堀本は吉野の山持で、西日本化学の株を五百万株持っている。戦後西日本化学が生れた

当時からの資金主であった。もう六十歳になるが、精力絶倫というのか、大きな土地の売買で金を増やしている。

綾子は後妻で、三十二歳であった。堀本には惜しいほど気品があつて美しい。

多治見は将来のことを思い、堀本に近付いて綾子を知つたのだ。まだ二人の間に関係はない。危くて、まだまだ手が出ない。

だが綾子が、堀本に満足していないのは、明らかであった。

二

多治見は数人の女の顔を思い浮べる。ファッションモデルもあれば、コマーシャルガールもある。バーのマダム代理もあれば、ホステスも居た。それ等の女達はみな美しく、それぞれの味を持っていた。それになによりも良いのは、彼女達には、交際から生ずる危険性が少ないことである。それが、女達の顔や身体を想像する際、純粹の楽しみを多治見に与えてくれる。危険性のある女には、その女がどんなに魅力があつても、多治見は手を出さなかった。社内にも美しい女子社員は多い。ことに秘書課員は、小ボスの頼子以外は、大抵美しい。その気になれば、ものに出来そうな女性も居たが、多治見は自分を押えている。或る時が来るまでは、社内の女性とは関係しない。或る時というのは、多治見の野望を達する時である。その時こそ、利用価値のある女と、肉体関係を結ぶ必要があつた。

それまでは危険である。

多治見には、三十六歳の妻君と二人の子供が居る。男女一人ずつて、高校と中学生だ。

二十八歳の年、多治見は、妻の幾子と見合結婚した。幾子は鉄問屋の娘であった。

実家は財産家である。見合の条件として、多治見は財産家の娘であることを決めていた。しかも血縁関係の少ない娘である。

幾子は三人姉妹の末妹であった。姉は養子を取っている。実家の財産は億に近いのではない。多治見が課長時代、郊外に家を建てられたのは、幾子の実家の援助があったからである。

多治見は、部長になるまでは、がむしゃらに働いて来た。三十歳代、遊びにうつつをぬかすようでは、四十からの人生が楽しめない。多治見は、自分の人生を後半に賭けたのである。多治見が部長になったのは、一昨年四十一歳の時だが、多治見の女遊びも、それから始まったようである。だが多治見は、女に溺れるおぼれるということはない。

冷静な眼を忘れず、ひそやかに遊んで来た。五時四十五分に、多治見は社を出た。宴会とか、仕事で夜の交際のない日は、週に二回位しかないが、その夜だけは自分自身の生活を持つことにしている。

車は自家用で、セドリックだ。社の駐車場に置いてある。この頃は、係長クラスでも、車を持っている者が多い。

多治見は駐車場で顔を合す部下達には実に愛想が良い。事業以外の、他の部課の連中にもそうである。

内心多治見は、若いくせに、月賦で車を買ひ、月賦代に追われながら、ひいひい言っている社

員を輕蔑している。

しかし、駐車場は、彼等を手なずけるには絶好の場所である。オーナードライバー仲間という意識が彼等にもある。

そんな連中は、挨拶一つするにも、多治見に対して甘えと親しみがある。その点を多治見は利用しているのだ。

「部長、車の調子はどうですか……」

声を掛けて来たのは、営業第二課長の佐村である。三十六歳、なかなかの働き手だ。

「好調だよ、この間、岡山まで行って来た、一家を乗せて大サービスだよ、君のはコロナだったね」

「はあ、旧型です、新型は出足も早く、良いですが、吾々の身分じゃ、なかなか買い換えませんよ」

「第一線の課長が、そんなことを言っちゃ困るね、君とこの部で、車を持っているのは何人位居るかね」

「七、八人じゃないですか、まだ十人にはならないようです」

「やっぱり営業は威勢が良いね、まあ君も、バーのホステスを乗せて、事故だけはおこさないでくれよ」

「あれは大恥ですな……」

こんな談笑のうちに、彼等の心をとらえる。多治見は、車をミナミの駐車場につけた。

宴会のある日は車を運転しない。

鞆をトランクにしまい、身軽になってネオンの街に出た。多治見が利用する駐車場は、車の鍵を客が持つようになっていた。多治見は、鍵を預る駐車場には、車を置かない。

トランクの中の鞆が心配だからだ。心斎橋に出、喫茶店に入って必ずコーヒーを飲む。

煙草を吸いながら、途中で買った夕刊を読む、一般紙と経済紙である。

それから多治見は饅飴屋に入る。狐饅飴とか天麩羅饅飴を喰べる。

西日本化学の事業部長が、大衆食堂で、夕食に饅飴を喰べるなんて、誰も想像しないだろう。

だが宴会食に食傷した多治見には、饅飴が一番旨いのだ。多治見はアルバイトをしながら大学を出ている。饅飴には、貧乏だった青春時代の郷愁がある。

午後七時半である。約束していた電話を掛ける時間である。多治見は先ず、コマーシャルガールの、北川直子のアパートに電話した。

「部長さん、もう出掛けようと思っていたの、お仕事が終わるのは、十一時頃になるわ……」

「それじゃ十一時半に、何時ものところで、車を停めて待ってよう」

「今夜は何時頃まで良いの？」

「そうだね、二時頃までなら……」

「なるべく早く行きます、じゃ、ね」

北川直子との電話が済むと、今度は堀本綾子に電話した。

堀本が居ないことを祈りながら、

「御主人いらっしゃるようですてしょうか……」
女中に尋ねると、

「あの、ただ今御留守ですが、どちら様でしょうか？」

多治見は、しめた、と思いながら、

「西日本化学の多治見です、御子息さまのことで奥様に……」

「はい、少々お待ち下さいませ」

間もなく堀本綾子の湿ったような声が聞えて来た。多治見は、その声を噛み締めるように味わいながら、

「先日はどうも、失礼致しました」

「多治見様ですか、ほんとにこの度は、色々とお迷惑なお願いを致しまして」

「いいえ、僕に出来ることなら、なんでもおっしゃって下さい、それから、その件でちょっとおうかがい致したいのですが、お暇御座居ましようか……」

「はあ、どうぞいらして下さいませ、お待ちしていますわ……」

綾子の声は優しく丁寧だが、浮々したところはない。多治見と会うことに異性を意識していないようである。

多治見は大きく息を吸い込んだ。ふてぶてしい闘魂が湧き上って来る。

堀本には二人の子供が居た。二人共先妻との間の子で、綾子の子ではない。長男は大学を出て、堀本が出資している土地開発会社に勤めている。次男は高校三年であった。余り成績が良くない。

ところが、次男はB大学に入りたらしい。B大学は関西の私立大学では名門で多治見の母校でもあった。

それを知った多治見は、一応母校の教授に話してみると、自分から持ち掛けたのである。堀本に取り入り、綾子に接近するには、絶好のチャンスであった。

この間の日曜はそのため一日潰つぶしている。堀本の邸宅は帝塚山てづかやまにあった。

敷地は七百坪ほどあるだろうか、庭樹がうっそうと茂り、高い石の塀で囲まれている。

大きな家だが、新しいものではなく、戦前の邸宅である。堀本は戦後間もなく、没落ブルジョアから買ったのだが、多治見はこんな古めかしい家を買うより新しく建てた方が良いと思う。ところが、堀本はこの家に固執している。なんでも戦前のC財閥一族の持ち家だったらしい。堀本が執着しているのは、案外そんなところかもしれない。

表玄関は古い檜かの木の手扉で、大きな鉄の輪が二つぶら下り、鍵が掛っている。めったに開けられない。西日本化学では、この扉から入れるのは、社長ぐらいだろう。

多治見は内玄関に通じる門のベルを押した。女中が、多治見を応接間に案内した。

庭には築山や池もある。池には落ち葉が浮き、静寂そのものである。

こんなひっそりした邸宅の中で、堀本綾子は、一体なにを考えて生きているのだろうか。

多治見は応接間で、ネクタイを締め直した。

幻の花

応接間には厚い支那絨毯じゆうたんが敷かれている。絨毯の厚さは三センチは充分あるのではないか。マントルピースの上に金と銀の仏像が二つ置かれている。綾子の足音がしないので、多治見は手に取ってみた。ずっしりと重い。

どうやらこの仏像は本当の金らしい。壊れないものと分っておりながら、多治見はおそろおそろ置いた。

軽いノックの音がしたので、多治見は急いでソファに戻った。綾子は匂うような紺地の着物姿である。帯もきちんと結んでいる。

最近、家庭に居る主婦で、このようなきっちりした和服姿を見ることはめったにない。

綾子よりも、むしろ亭主の堀本の趣味ではないかと多治見は思っている。

多治見は丁寧に挨拶した。綾子も多治見に負けないくらい丁寧である。綾子は多治見と向いあって坐った。紺の袖口に消えている綾子の腕の白さがまぶしい。坐ると太腿の外側がまるやかな曲線を描いて、着物の下の肉付の良さを現わしている。おとがいから耳の辺りにかけての肌は、透すけているようで、そこだけ少女の面影が残っているようである。多治見は、初めて見た仏像を

尋ねた。

「ええ、金らしいんです、応接間には不似合なんですが、たくが飾れと申しますので、でも、十日もすると飽きて、他のものに変わるようですわ」

綾子はつつましやかな微笑を浮べた。瞳は少し斜視なのか、宙をさ迷っているようである。そのくせ、時々凝視するように眺めることもある。こうして向き合っていると、鼻の穴が拡がり、頬のぶ厚い肌が盛り上ったような堀本の顔が浮ぶ。一体どういう手段で堀本は綾子を得たのだらう。やはり金の力なのか。堀本の女遊びは有名である。今まで囲った女だけで、二十人ではきかないのではないか。その場限りの浮気は数え切れない。

現在でも数人の女を囲っている、という噂である。アパートに住まわせているのではなく、それぞれ一軒の家を与えている。

堀本の女遊びの激しさを現わしているエピソードに、伝説めいたものがある。

昔、堀本がなじみを重ねていたキタの芸者が居た。姐ねえさん株の女である。

ところがどういう方法でものにしたのか、堀本は妹芸者にも手を出したのである。

格式ある色街では、めったに起らないことである。初めは隠していたが、やがてそのことが姐さん芸者にわかった。堀本がその女と京都の旅館に泊っているところへ、姐さん芸者が酔って暴れ込んだのである。旅館のおかみがとめる暇もなかった。姐さん芸者はかみそりを持っていた。

すると堀本は慌てずに姐さん芸者を組み伏せ、かみそりをもぎ取ると、手を縛り、手拭いでさるぐつわを咬かませ、柱に縛りつけたのである。そして、姐さん芸者の眼の前で慄ふるえている妹芸者